

生活

seikatsu@asahi.com

B型肝炎と闘う

国との訴訟 解決待つ原告ら

幼い頃の集団予防接種などでB型肝炎に感染したとして、患者らが国を訴えた集団訴訟。今月、国が札幌、福岡両地裁で和解協議に入ることを表明したが、具体的な救済策は示されず、解決先延ばしへの不安が原告らに広がる。慢性肝炎や肝がんを抱える患者や、家族を失った傷が癒えない遺族ら原告の姿を追った。

(写真と文 高波淳)



肝臓のコンピュータ断層撮影(CT)検査を受ける田中義信さん

命の線引き許さない 田中義信さん(51)＝東京都

「勇気を持って明るく生きる」。昨年1月、がんの疑いが高いと診断され、日記に記した。翌月の手術の朝、「がんとの長い戦いが始まるが、決して負けない」と書いた。

大学生協の専務理事として就職支援などを担当し、充実した日々だった。そんな生活が一変した。がんは再発し、1年間に84日間入院した。東京から横浜への通勤が難しくなり、転勤を願い出た。妻と2人の娘、愛犬との時間を大切にしたい。訴訟の解決を見届けたい、と思う。

国は、原告らが予防接種を受けたことの証明のため、母子手帳の提示を求める。「手帳の有無で命の線引きをしようというのか。大臣、あなた方は持っていますか」。18日、面談した長妻昭厚生労働相らに問うた。

苦渋伝えるのが使命

窪山 寛さん(63)＝福岡市

夜、部屋の明かりをつけたまま眠る。明かりを消せば、二度と目覚めないのではないかという恐怖からだ。

07年にミニドックで肝がんが見つかった。1年の間に再発、再々発した。肝臓の3分の1を切除、がんを刺しラジオ波で焼く治療を続けた。2人の子が巣立ち、妻の薫さん(62)とのんびり暮らすつもりだったが、かなわなかった。枕に顔を押しつけ泣く妻に「最後までやすらぎを与える」とすらすらできない」と心の中でわびた。

「まさか自分が国を相手に裁判をするとは思わなかった」。昨年、余命3年と宣告された。病気を押し付けて抗議行動の先頭に立つ。雨の中の厚労省前の座り込みでは、体調を崩してうずくまり、妻や仲間と介抱された。「患者の苦渋を伝えることが、国に命を区切られた自分の使命だ」と思う。



厚労省前での座り込み中に体調を崩し、妻の薫さんに介抱される窪山寛さん

息子の死、なぜ

坂岡佳子さん(72)

＝横浜市

11年前、32歳の長男毅さんが突然血を吐いた。「B型肝炎による肝がん余命1週間」と診断され、25日後に亡くなった。夫はほどなく、うつ病になり入院した。

「母子感染が原因と考えられる」と医師に説明された。毅さんもそう思いこんだまま亡くなった。「とり返しつかないことをしてしまった」と自分を責めた。その後の検査で、自分も夫も感染していないとわかった。息子はなぜ死ななければならなかったのか。苦しみながら、手探りで調べ、訴訟に加わった。



孫と一緒に長男毅さんの墓参りをする坂岡佳子さん

墓参りのたび、「早く解決するよう後押ししてね」と話しかける。「国の責任だったと息子に報告したい。裁判が長期化し、解決を見ずに亡くなる人がこれ以上増えないでほしい」。提訴後死亡した原告は10人になる。

子の成長見続けたい

28歳、新婚1カ月で慢性肝炎を発症し、仕事を失った。

母と弟もB型肝炎に感染している。12年前、弟が交通事故に遭い、血液検査を受けたのがきっかけで判明した。「集

石川冬美さん(32)＝川崎市



長男を抱く石川冬美さん

団予防接種を受けた母親から2人の子に感染した可能性が高い」と医師は言う。

3年前、長男を妊娠した時、「うつしてしまったりどうしよう」と悩んだ。生後間もない長男は、母子感染を防ぐワクチンの注射や検査を繰り返して受けた。

「大丈夫と知って、初めて息子の誕生を心から喜ぶことができた」

子どもと折り紙を折ったり、絵を描いたりする生活に充実感を感じている。だが、医師からは、がんの危険性があると言われている。「息子のランドセル姿を見ることができるのか」。不安を抱える日々が続く。